

婦人と子ども

第貳巻第參號

明治三十五年三月五日



(本欄は凡て轉載を禁ず)

骨ものがたり

やまどの翁

野猪がすんでいましたとき。所が、この野猪 毎晩  
 毎晩、村にでてきてわ、畠をあらしたり、牛や馬を  
 とって食ってしまったり、おまけに 家の中までは

入いってきて、人ひとにまでもくってかゝるとゆゝ風ふうです  
 から、さゝ村むら中なかが大騒おほさわぎでもってこの事ことを殿様とんさまえ  
 届とけてでました。

殿様とんさまわ、だんくとと其譯そのわけをおきまになつて、はて  
 さて難儀なんぎなことができたものだ。こ覺おぼしめされた  
 ですから、そこで早速さつそく、その野猪いのししを殺ころして出でた者ものに  
 わ澤山たくさんなご褒美ほしびをくれる、とゆゝお布告ふこを村中むらなか  
 え出ださせました。

けれども、恐おそろしいものだから、誰たれも殺ころして出で  
 者ものがない。野猪いのししのあれるのが前まえよりも尙なほ烈ひどい。村むら

の一人 一夜も安心して寝られる晩がないとゆー大騒ぎになりました。

そこで、殿様もよくくお考をきめられて。こんどわ次の様なお布告を、村中え配らせました。

『野猪を殺して村中の難儀を助けた者わご褒美として殿様の後繼にしてくれる』

こんな甘い話わ又とあるものでない。けれども誰一人野猪を退治して一村の難義を助けよーとゆー人がありませんでした。

しますると、此村の外れに兄弟の獵師が住んで

居ました。兄わ猛夫といって、身体も丈夫で、力も強いことわ強いのだが、いけないことにわ、心がねぢくれておって、意地悪の我儘者である。弟の方わ美彦といつて、兄ほど強くわないが、心が優しくつて、そしてまた、至極おとなしい、よい子であつた。ある晩のこと、この二人の兄弟わ、どこかであのお布告をきいてきて、猛夫が美彦にゆゝにわ、『な、美彦、面白いじやないか、あの野猪を退治する、と、殿様の後繼にして下さるとゆゝのじや、あ、面白い、面白い、ど、だ、一番退治にでかけよ、じや』

ないか。』

すると美彦わ

『そーですとも、なんでも大勢の人の爲になること  
ですから、一ひとつ奮發ふんぱつしましよー』

『うん、そーか、でわこーゆーことにしよー、この  
兄あにかえらいか 夫それとも弟あとうがえらいか 一いち番ばんに野猪いのししを  
退治たいじした者ものがえらいこととして 二ふた人たりでかけをしよ  
ーじゃないか』と猛夫たけうがいーだしたものですから、  
美彦よしひこも『それわ面白おもしろかるー』とゆーので すぐすぐに相談そんたん  
がきまつて、猛夫たけうわ 其晩そのばんすぐ支度しどをして 山やまの奥おく

えとわけ入りましたが、美彦わ翌日の朝になつてから態と途を違えて、これも同じく奥山さして出かけました。

それから美彦わたゞ一人深い山道をたどりながら、おくえくと分け入りました所、不思議なるかな、眞白な鬚を一面に生やした老翁が忽然と出て來ました。

『これくお前わ、今から野猪退治にでかけるのだろ、あれわ大變な古猪だから、とても尋常では退治が六かしい、私が今弓と矢とをあげるから、これ



で射て取れば 先づ大丈夫だ』

といーながら、老翁わ弓に一本の矢をそえて美彦にくれて置いて その儘どこともなく 消えてしまいました。

美彦わ、はて、不思議なこともあるものだ  
 な と思いましたが、これこそ日頃信心せる神のお  
 助けに違ない これでわ野猪を退治することも疑な  
 いと心勇んで、なをく奥深く分け入りました。す  
 ると忽ち 向の方からして 一陣の盲風、ピューと  
 ばかり、木の葉をまいて吹いてきたかと思うと、ど



こから出てきたのか、小牛の様な一匹の大猪、鼻を  
 ならし、牙を怒らし、木ともいわず、石ともいわず  
 あたるにまかせてなげ上げながら眞一文字に飛び出  
 した。

『それ』と美彦わ 一歩下って身を構えたが、名に  
 負一 幾年経たのか知れぬ 古野猪の事だから、身  
 体丸で 石の様に硬まつて居て、とても一様の仕  
 方で、矢でも玉でも通るものでない、美彦わ、心  
 の中で一生懸命に、前の老翁を念じながら、弓を満  
 月の様に引つ絞った。猪わ それと見て疾風の如く

美彦目がけて突き進んで來たので、こゝぞと一息に切つて放つた所、誤らず、勢込んだ大猪の額の眞たゝ中を射通したから、たまらない。さしもの古猪も牛の様な、うなりごえを上げて、其儘其場に斃れて死にました。